



ヨハン・チェルマーさん

若竹寮ではこの16年間に175名の子どもたちが学びました。寮生全員が山岳民族の出身で、アカ族、モン族、カレン族、ラフ族、ヤオ族の5つの民族の子どもたちが共同生活を送っています。卒業生の多くが自分たちの家族の面倒をみるまでに成長し、地域社会の助けとなっています。

現在、タイは経済危機に直面し、若竹寮で暮らす子どもたちの両親も深刻な影響を受けています。若竹寮も同様です。しかし

【寮長】

ながら、子どもたちは寮での生活を楽しみ、スポーツ大会やクリスマス会など様々な行事にも喜んで参加しています。海や川へ出かけることもあります。教室では決して学ぶことができない体験が、彼らに自信を与え、協力し合う心を育てています。スタディツアーやワークキャンプで、里親の皆様や同年代の学生たちが若竹寮を訪問してくださるのを皆とても楽しみにしています。遠く離れた場所から永きにわたり若竹寮をご支援いただき、心より感謝申し上げます。里親として若竹寮を支えてくださるすべての皆様の上に、神様の豊かな恵みがありますようにお祈りいたします。

【里親】

里親になって8年になります。一時的な支援ではなく、継続的に関われる方法はないかと考えていた時に、新聞記事でこの里親制度を知ったことがきっかけでした。

小学生だった里子も、今年高校を卒業。直接会う機会はありませんが、タイから送られてくる手紙や写真を通して、子どもの成長ぶりを見るのを楽しみにしています。先日行われたタイフェスティバルにも参加しましたが、現地の様子がよくわかり、行ってよかったと思います。少しでも若竹寮の子どもの夢や希望が叶えられるように、もっと支援の輪が広がればと思います。

男性(62歳)

若竹寮と  
若竹寮を支える  
人たちからの  
メッセージ

【若竹寮生】

ミッキーことアランヤーン・セーフンさん(右・ヤオ族)とプランことパニサラ・ターホンさん(左・アカ族)の2人に印象的な日本語を書いてもらいました。



私はミッキーマウスが大好きなので、ミッキーと呼ばれています。困っていることを「努力」して解決していきたいと思っています。留学して9カ月になります。毎日楽しくて、時間が経つのがとても早いです。毎日、6時30分に起きて、自転車ですぐ学校(東部YMC



私はタイの果物・マプランが好きなので、マプランというニックネームです。いろいろなことをやり遂げる力がほしいので、「気力」という言葉を選びました。熊本に来て驚いたのは、街の中をみんながとても早く歩くことです。最初は、何か事故でも起きたの

A)に行きます。授業は2時に終わるので、その後は友達と一緒に勉強やおしゃべりをしています。日本は景色や街並みなどがとても美しいと感じています。里親の方には、阿蘇山や長崎、名古屋などいろいろな所へ連れて行っていただきました。お気に入りには水前寺公園です。熊本は優しく親切な人が多く、スーパーのレジでぶどうを買おうとしたら、傷んでいるからと他のものに代えてくれたこともありました。ただ、男性も眉を細くしていることには驚きました。

タイに帰ったら、寮のみんなにも日本語を教えてあげたいと思っています。旅行でタイを訪れる日本人が多いので、将来は旅行者向けの通訳の仕事に就くことが目標です。

かなと思いましたが、高校生が大人のように化粧をして、アイシャドウをいっばいつけているのもびっくりしました。また、タイと日本では包丁の使い方が違います。皮などをむく時に、日本では自分の方に向けて使いますが、タイでは外側に向けて使うので、里親の方からは、「怖い!」と言われてしまいました。

日本へ来て2回ほど着物を着る機会がありました。とてもきれいで、素晴らしい日本の文化なので、タイへ戻ったら寮のみんなにも伝えたいです。

若竹寮で生活して8年になります。日本語を話せる人が寮長しかいないので、熊本で学んだ日本語を活かして、将来は寮のために働きたいと思っています。

タイの魅力にふれ、  
山岳少数民族への理解を  
深めるタイフェスティバル

北部タイ山岳少数民族の生活の様子や社会問題について知ってもらおうと、6月28日(日)、上通Y MCAでタイフェスティバルが行われました。里親をはじめ、過去にタイ・ユース・ワークキャンプやタイ・スタディツアーに参加したメンバーやY MCA国際ユースボランティアなど様々なボランティアの支えによって開催が実現。当日は、2008年に実施されたワークキャンプの報告や、タイグッズ、グリーンカレー・タイヌードルなどのタイフードを販売するバザーが行われました。

また、Y MCA学院日本語科で日本語を勉強中の若竹寮生ミッキーとプランが、タイの山岳少数民族の暮らしについて日本語で説明。「両親の世代はタイ語がわからない村人も多く、そのため病院に行っても病状が説明できなかったり、十分な治療が受けられない」など、具体的な課題についても述べられました。

その後、それぞれの民族衣装に着替えた2人から、「ズボンの刺しゅうだけで1年半かかる」「頭に巻いた布の長さは4.5m」などの解説もありました。普段はなかなか見ることができない姿だけに、会場では2人と一緒に記念撮影をする場面も。タイについて、より深く知ることができた一日となりました。

